

都市部偏りで虚構報道



中村 哲

16

日本に帰ってかろうじて見いだせるアフガン関係の記事は、「カルザイ大統領選出の行方」ばかりである。現地と日本とで温度差があるのは、仕方ないことだろうが、ゆがんだ現状認識を残したまま忘れ去られると、割り切れぬものを覚える。

帰国する日本の印象は造花の世界である。身の回りの出来事が、無難に流れてゆく。街を抜けばちり一つない街路に人が行き交い、華やかで洒落た店構えが立ち並ぶ。小奇麗な車が信号を守って整然と列をなす。「不況だ、リストラダ」と言うけれど、駅にたむろするホームレスの人々さえ、何だか私よりもこぎつぱりしている。



交渉をすることも、襲撃や爆弾を恐れることもない。どんな意見を述べるのも遠慮はいらないし、インターネットをあざればたいていの情報が手に入る。携帯電話で通信は自由自在、列車は一分の狂いもなく発車する。政治家は相変わらず茶番を繰り返し、マスコミは変化する話題を追求するのになしく、人々は次々上陸する台風に驚き、頻発する

アフガンのゆがんだ認識

凶悪犯罪に眉をひそめる。それでも「世はずべてこともなし」である。

しかし、この「文明国」の日常に忍び込む危機は気付かれない。人と人、人と自然との関係が次第に希薄となり、メディアを介する情報だけで何かを知った気になる。私たちの日常は、いわば人為で構築された世界である。事実を五感で確かめ、手応えを感じることはない。情報の切り張りて形成された世論や世界観が、人々の頭脳に無秩序に沈殿し、その上を世の関心が流れてゆく。

自然との関係もそうで、以前は想像もできなかったような精巧な映像で、動植物の生態、川や海の絶妙な生態系や自然環境のバランスを知ることが出来る。しかし奇妙なことに、自然との生の接触は情報に反比例して激減しているのである。

かつて私は「昆虫少年」だった。山野を駆け巡り、めざす蝶を網で捕らえた時などは、心躍る瞬間である。羽を痛めぬよう閉じ、そっと胸を押さえてその鼓動を止める。ぴくぴくと動く虫の感触は今でも指先に残り、辺りの森の光景、野草や樹木の香り、川のせせらぎ：懐かしく鮮明な記憶として焼き付いている。今こういった機会は減り、映像が自然を媒介する。

「アフガニスタン」に対する認識も同様である。マスメディアによる限り、「民主主義」の体裁が整い、選挙が行われ、いかにも安定に向かっているような妙な錯覚が与えられる。メディアが伝え得るのは、「国際社会」の暗黙のシナリオに沿った事象である。それはそれで無意味とはいえないが、限定付きの上澄みの出来事だという自覚がなければ、誤った認識につながる。



重機を修理する中村医師(右)

実は、アフガニスタンの混乱は少しも収まっていない。各地方では、いまだに軍閥が割拠し、中央政府の威光は、唯一知識層の多く住む首都カブールにとどまっている。そもそもアフガニスタンのほとんどの農村地帯で、二千万のアフガン人の八割以上が農民

である。その彼らの声がメディアによって「国際社会」に届くことはない。東部山岳地帯は、いかなる外国軍をも寄せつけず、武装した農民たちは耕すオオカミたちの群れに等しい。外国人が、農村社会の地縁・血縁関係を軸とする複雑な対立同盟を読み取るのは、ほとんど不可能だと言ってよい。利を得れば和し、敵と見れば抗争するアフガン農村社会は一筋

縄ではゆかない。一万三千人の駐留米軍の軍事活動域は拡大し、NATO軍の増強が要請されているが、少なくとも東部では、地上をまともに移動できず、ほとんど空輸によっている。アフガン社会では、戸籍はもちろん整備されておらず、人口や年齢さえ分からぬ。一部の知識人を除けば、「国民投票」などまともにできるとは誰も考えていない。しかし、紙の上ではできる。そして、それがあたかも実現可能であるかのごとく世界に伝えられる。農村部の患者や作業員と接して思うのは、都市カブールに偏る報道が、虚構の現実認識を振りまくことになるといふことだ。

このことは、報道関係者を責めれば済むことではないし、「アフガニスタン」に限った話でもない。「知る」ということの限界をわきまえず、大地に根差す人々の声を聞く努力を怠れば、造花のような妄想世界にさまようことになるというのである。(医師・ペンシャール会現地代表)

いまだに軍閥が割拠。混乱少しも収まらず

「ペンシャールから沖繩へ」は毎月第4日曜日に掲載します。